読書感想文コンクール　小学校1・2・3年生の部

入選

下山　悠希（しもやま　はるき）　楢原小 3 年生

作品名：王子とつばめのやさしさ

図書：しあわせの王子

　この本はぼくの家に昔からあります。前に読んだ時に感動したので三年生になった今、もう一度読むことにしました。
　この作品は、高級なかざりをつけたしあわせの王子の像とつばめが登場します。お金のないまずしい人たちに、自分をかざっている宝石などをあげてしあわせにしてあげる良い話です。そして、その宝石を運んだのがつばめです。だけど、王子とつばめは最後に死んでしまうので、悲しい話でもあります。
　ぼくは、この本の中でつばめが南の国へ行かず、さむくて死にそうでも、王子の目のかわりになって宝石などをまずしい人に届けていた場面が一番心にのこりました。なぜなら、つばめは本当なら仲間のいる温かい南の国でくらすはずでした。しかし王子が目を失ったことが、かわいそうだと思い、自分の死をかくごして身がわりになったことが、やさしいと思ったからです。
　もし自分が元気いっぱいのつばめだったら、王子をギリギリまで助けてあげて、すごい速さで南の国へとぶので、きっと死にません。反対に年よりのつばめだったら、命を使い切るまで王子のことを手伝うと思います。
　つばめ以外に、ぼくは助けられた男の子の未来について想像してみました。男の子は、つばめが届けてくれたルビーのおかげで、薬が買えて元気になりました。やがて大人になり、王子の話を知って、
「もしかして助けられたのは自分かも。」
と気づいたとします。きっと男の人は、王子やつばめと同じように、困っている人を助けてあげるでしょう。なぜなら、二人に命を助けられたおん返しをすると考えたからです。
　ぼくがこの本を読んで感じたことは、神様が王子とつばめに永遠の命をあたえたように、困った人を助けると自分に良いことが返ってくるということです。そして、おたがいが幸せを感じやさしい気もちになれるということです。

ぼくには一才になったばかりの妹がいます。まだ話せないし、歩けません。毎日たくさん話しかけたり、一緒に遊んだりしています。泣かれると困ってしまうけれど、すごい笑顔でぼくのところに来てくれると、とてもうれしいし、ぼくも笑顔になっています。

これからぼくは、色々な人に出会うでしょう。もし困っている人がいたら、王子やつばめのことを思い出して、自分に何ができるのかを考えて助けてあげられる人になっていきたいです。なれるかな……。